

今後の部落解放運動の方向

大賀 正行

はじめに

四月一日から「地対財特法」がスタートしました。また、六月には全国大会が開かれ、つづいて各都府県連大会が開かれて、これからの運動の方向が出されていきます。

以下にのべる私の考え方は、去年の全国研究会でもその芽が出ておりますけれども、今般これを発展させたかたちで報告したいと思います。

一、情勢の基本認識Ⅱ反動化と国際化

① まず、今日の情勢の基本認識をわたしは、反動化と国

ズという人が現れまして、経済に国家が積極的に介入することによってこの恐慌をなんとかくりのべていくという、まさに資本主義が修正資本主義あるいは国家独占資本主義の段階に移っていきました。戦後四十数年間、恐慌らしきものもありましたが、あの一九二九年の世界大恐慌のような恐慌は、まだ私どもは経験しておりません。本来は恐慌として起こるべきものを、おこさないようにあの手、この手でやってきた。その分だけその矛盾の蓄積は大きくなるわけですから、今度世界恐慌が起こったら、一九二九年どころじゃない。それはもう地球がわれるくらいの大騒動になることは目に見えていることです。

② この頃、本屋へ行きましたら、そういう関係の大前研一氏や長谷川慶太郎氏などのビジネス本がいっぱい並んでいます。「せまりくる世界大恐慌」、これはまことしやかに叫ばれておりますし、「一ドル百円時代」というような本も出ております。ドルは紙きれになるとか、いろいろ言われております。そういう中で日本はどうするのだということとです。これまで輸出がうまく行っておりましたので、その分だけ矛盾が表に出なかったんですけれども、円高という形でしっぺ返しをくらわされる中で、いよいよ大変な時代に来たということとです。失業率も三%台を越えたように、大量失業時代にさしかかるといふことで、その中で、

際化の時代ととらえます。両者は一体のもので、どちらも今日の資本主義体制の危機から生まれております。ご承知のように、資本主義体制の危機というのは経済面からいえば、生産と消費の矛盾から生まれてくるわけです。社会化し、まさに相対的過剰生産といわれるものです。生産はどんどんロボットやコンピュータや先端技術といった科学技術が発展して、生産力がのびてきます。しかしながら、その作ったものを買うのは、安い月給や重税でしぼられている労働者、国民でありますから、どうしても作ったものが売れ残るといふ、資本主義がもっている宿命的な矛盾でして、ここに過剰生産というものが常に伴うわけです。十九世紀から一九二九年の世界大恐慌までではだいたい十年に一回ずつ恐慌がやってきたわけですが、それ以後ケイン

政府や官僚や企業も、この危機をなんとかして生き残らねばならない、まさに生き残り戦略ということで、必死になつておるわけです。ここから矢つぎばやに、いわゆる何とか改革というのが打ち出されてくるわけです。やれ行政改革、やれ財政改革あるいは教育改革、税制改革と、次から次と、いわば「日本大改造」のプログラムが断行されていきます。企業においても「首切り・合理化」「海外進出」と、命がけの奮闘ぶりです。

③ こういう一連のなかで、今般その同和版・部落版といたしまして、地対協路線が出てきたというわけでありまして。昨年八月の基本問題検討部会報告、十二月の意見具申、本年三月の啓発推進指針、まあこれらは三点セットとして、ここにこれまでの同対審答申にとってかわる地対協路線というものが、厳しくうち出されてきたということとあります。だからこういう状況の下において、部落解放運動もどうあらねばならないか、あるいは、それに関係して、我々の研究のテーマもどうあらねばならないか。真剣に考えないといけないと思うわけです。

これまで同対審答申にあるいは特別措置法にそって、かなり順調に運動が発展してきました。「同和問題の解決は国の責務であり、同時に国民的課題である」ということで部落解放運動は行政や企業のみならずあるいは宗教者や

市民団体、労働組合、国民各界各層、学者、文化人等の支援をうけ、非常に幅広い連帯や共闘がひろがってきました。二十一世紀にむけて解放の展望が出てきたと言ってもよいと思います。ところが、これに冷水をあびせるように、一つの反動逆流として地対協路線が出されてきたわけです。部落解放運動にとって戦後最大の危機の時代がやってきたと思います。

こうした状況のもとにおいて、どのように運動のあり方を考え、反動化をはねかえしていくのか、緊急にその対応がせまられてきました。

④ 一方、同時に、国際化という問題が大きく出てきたのであります。幕末の黒船と明治維新（ペリー）、敗戦後の占領軍と戦後改革（マッカーサー）、そして今日、いわば第三回目の黒船を迎えるような時代（円高）。経済大国になった日本がいよいよ、本格的に国際社会に乗り出すと、当然そこには経済摩擦だけでなく、人権や文化摩擦というものを必然ならしめます。これを軍事力（暴力）を背景にして乗り切っていくのか、それとも共存共栄の平和路線でいくのか。米・欧の「日本たたき」や途上国の反発にどう対応していくのか、こうした状況の中で、人権の確立を求める運動の一つとして、部落解放運動はどうかかわっていくか、ねばならないのか。ピンチだといっているだけでは、す

さに京都の「オールロマンス事件」（一九五一年）であったと思います。ここで朝田善之助氏の登場となるわけですから。

敗戦後の全国大会の運動方針を読みますと「差別問題だけに闘争が偏する傾向」を批判した文書が目にとまります。「現在の糾弾運動もまた全水時代と同じように、差別問題に対する闘争が中心になっている。差別問題が起るると異常な熱意をもって活動するが、部落民衆の生活を安定させ向上させるための経済闘争や文化闘争は積極的に行われなぬ。これこそが部落解放の基本闘争であるにも拘らず、なおざりにされがちであった。これは差別事象が発生する社会的根拠についての正しい認識が徹底していない証拠である」（一九四九年第四回大会）と書かれているわけです。それを、具体的実践としてやってのけたのが、オールロマンスの闘争だったわけです。そこに私は当時の京都府連、朝田さんの理論や解放運動史上における功績があったと思うのです。やはり実例の力が大きかったですね。京都に見えぬ、とこうなるわけです。朝田さんもこの「行政闘争」方式を熱心にオルグされたわけです。これが全国的に広がっていき、一九五五年に部落解放同盟になった頃「行政闘争」方式が確立していったのです。

その波が大阪に來たのが、実は、一九五七年です。大阪

まなわいわけです。危機意識をしっかりとつとめることは大事ですけれども、厳しきだけでいきますと、出てくる答えは「もうこわいから」「しんどいから」と日和っているか、それとも「なんとかせなあかん」というところから一種の「はねあがり」という両極端を生みだすと思うんです。やはりここは弁証法的に考えることが大切だと思います。そういった危機意識をしっかりとふまえながらも、その危機の中でチャンスを見通し、運動を進展させていく展望というものを示していかなければならない。これが我々研究者の任務ではないかということでもあります。

二、部落解放運動の現段階

① 今年には水平社創立六十五周年です。私は、これを大きく一期、二期に分けて考えてみたいと思います。水平社創立が一九二二年、部落解放同盟となったのが一九五五年です。この間三十三年間あります。部落解放同盟となってから今年まで三十二年間、ほぼ同じ長さです。いろいろありましたが、やはり第一期の大きな特徴は差別事件に対する糾弾闘争主導時代であったと思います。それに対して第二期の特徴は行政闘争主導時代であったといえると思います。そして一期から二期への移行の端緒となったのが、ま

は同促協という形ではやくから同和事業があったんですが、「行政闘争」という運動の展開は全国水準から遅れていました。一九五七年第六回大阪府連大会は、実は、私や上田卓三代議士が初めて参加した府連大会だったので、私は当時ちょうど二十歳で、上田氏は、十九歳でした。私らにとっては偶然参加した大会でしたが、後から考えますとこの大会が今日の大阪の運動を作るスタートとなった画期的な大会であったわけです。そういう運に偶然に出会ったわけで、そして、我々青年がこの第六回大会の方針を担っていく、そして大阪の運動をつくっていくというめぐりあわせとなったのです。

大阪はこの第六回大会以後、一九五九年の市内ブロック教育闘争の勝利を経て急速に運動が発展したわけでありました。又大阪だけでなく、全国に「行政闘争」方式が広まったのです。その成果は、一九六五年の同対審答申の獲得、六九年の「特別措置法」の成立、そして三年延長、それから八二年の「地対法」そして今般の「地対財特法」とつないできたわけです。そして環境改善や生活・教育面の改善、組織の拡大、共闘のひろがり大きな成果をあげたんですが、その一方で組織のたるみといえますか、ぬるま湯現象や利権問題、エセ同和といったマイナス面も生まれてきました。又、「逆差別論」とか「ねたみ意識」とかという問

題も生み出し、全解連という分裂組織も生まれたのです。

② 物事というのは弁証法的に発展するのでありまして、第一期の水平社の時代は日常茶飯時のように差別があったわけですが、そこでひしひしと差別に対する怒りがあったわけです。別に「差別とは何か」とか「立ち上がるべきだ」とか言わなくてもいいのです。お互いの差別体験を語り合ったらいいわけです。「わしは結婚の時、こんな差別を受けた」「就職の時にこんな差別を受けた」「学校でこうであった」というように。あの有名な山田孝野次郎少年が水平社創立大会の場で、学校での差別の体験とかをいっぱい訴えていますね。一場みんな顔中を涙して「差別は許せない」となるわけです。常に水平社の大会は、感動を呼ぶ大会となるわけです。水平社のエネルギーは差別への怒りであった。決して水平社は家建てろとか税金まけろとか銭をかせとか奨学金よこせとか、そんなので怒ったのではなくて、差別への怒りが原点であったのです。それだけ感情的ですから、熱気があります。又、逆に観念的になって差別者個人を徹底糾弾するということになり、糾弾は成果の反面、「部落はこわい」という意識も生まれ、一般国民との間に分断の楔を打ちこまれました。「事件師」（エセ水平社）もはびこり運動に一定の混乱がもちこまれ、こうした事情からも権力の弾圧を誘導することにもな

ったりと合いました。部落大衆の不利益な問題や、要求は実は差別から来ているんだと。単に、指を四本出したり、「エッタ」と言われたりすることだけが差別じゃない。仕事がないこと、教育がないこと、生活の姿そのものが差別なんだ。つまり、差別の認識の広がり、概念の深まりとか、そういうものとして、とらえたということです。

解放運動に入る場合に、差別事件や差別糾弾をとおして解放運動に入る人と、生活要求を通して入る人と、二とありありますが（もちろん両方だぶっている人もいますが）、戦後の第二期は、後者が主導です。「寝た子」を起こすなという考えにとりつかれていても、生活から来る要求はあります。この要求を組織し闘かわせる中で、差別と位置づけて「寝た子」を克服していく。そして差別事件に出くわすと、単に、住宅や仕事だけじゃない、やっぱり差別というものを真剣に考えることが大切だと指導していく。生活要求から糾弾へのコースです。糾弾から生活要求へというコースと、生活要求から糾弾へというコース、この両方のコースがあるわけです。そういう中で、運動が進展して、今日、ご承知のような状況になったんです。

以上第二期は、一方で、全解連Ⅱ国民融合論というものが出てまいりましたし、また、今日の地対協路線も出てまいりました。これは妨害であり逆流ですが、またエセ同和

りました。糾弾のやり方を発展させる必要にせまられたのです。

一方、又、糾弾の成果は、現象的な差別事件を減少させていきます。そうすると部落大衆の中に差別は解消してきたとか、「寝た子」を起こすようなことはしない方がいいといった考えが影響をもちはじめます。まさにプラスはマイナスであり、成果は欠陥であるという弁証法的事情が起るわけがあります。だから水平社の糾弾の成果は、逆に水平社運動のエネルギーをそいでいくということにもなったわけです。だからいつまでも糾弾第一主義でやっておいたら、いつまでも柳の下にドジョウはおらん、ということとで運動は停滞するわけです。ですから新しい時代に新しい時代の運動方針を考えねばならない。そのことこそが問題になるのです。そこを朝田さんが新しく切り開いた。そこに朝田さんの「行政闘争」理論というものの大きな役割（功績）があったと思います。

③ 戦後の解放運動というのは、だいたいオールロマンス事件以後そして「行政闘争」方式のひろがりのなかで大きく発展したことになります。又、当時、都市部落などは戦争で焼野原になったとか、スラム的になって非常に貧困者が多いとか、悪環境で世間からも差別視されていましたから、「貧乏も差別や」といったよびかけは大衆の実感にびなど運動のマイナス面もいろいろありますが、同和問題の解決を「国の責務」とさせ、同和行政を推進させるとともに、組織を大きく拡大し、共闘の発展をちかとり、正に部落解放を「国民的課題」とすることができたということが、第二期の大きな成果だった。こういうふうに見えるわけです。

三、今後の展望・第三期の創造

① 第二期の成果として、地域改善がすんだ。ところが、新たに困難が出て来たんです。というのは、昔だったら、われわれに反対する人がおいたら、「文句あるんやったら、部落を一度見に来い」と言えはいいのです。それで、部落を見に行く。部落を見たとなん、「これはひどい」とみんな肝をつぶすんです。これが事実なのかと目を疑います。水たまりなどには、ねこもびっくりするようなネズミがいてるんです。わたしの家もそうだったですけど、六畳一間に六人です。一つの共同便所を、五軒六軒で使う。押し入れをベッド代わりにして寝ている家もありました。外見から「これはひどい」とすぐわかるんです。子どもの長欠・不就学。「非行」で学校が荒れている。「非行」が出るのもボロ学校のせいや。「そうや」ということにな

るんです。だから、「これが差別だ」と実にわかりやすかったわけです。ところが今日ではむつかしくなってきました。「へんムラを見に来い」と見に来てもらったら、「何や、うちよりええやないか」こう言われるようになってるんです。昔、「人間みな兄弟」という映画がありましたけど、「道がある。道が狭くなるところから部落が始まる」ということばで、映画が始まるのです。ところが、いまでは「道がある。広くなるところから部落が始まる」という感じですよ。全解連や地対協は、ここを利用して、もう差別は解消の方向にあると攻撃してくるわけです。

そういう状況の下で、部落解放運動は、「差別」をどう説明するのか、何をもって運動を発展させるのか。もちろん、今まで言ったことは、先進的な地域でありまして、まだまだ、全国には地域改善の全くすすんでいないところが沢山あります。まだまだ差別事件も続発しているし、糾弾の手をゆるめるわけにはいかない。だから、一期が済んだ、二期も済んだと、清算主義的にあれこれかかると言っているではありません。しかし、それだけでは運動の停滞が起こるといふことです。

二十一世紀に向けて質的を新しい方向を打ち出す必要が出てきたということですよ。一期から二期への移行が、オーロロマンス事件であり、京都府連がやったわけですが、今

ンから、一般地区の子供がうらやましそうに見ている。これでは、日共などの「逆差別」キャンペーンのよい材料にされてしまう。「みんな、泳ぎにおいでや」と言って、周辺地域の子供らにも呼びかけて行く。そしたら、一般の子は「ボクラでも泳いでいいの」と返って来る。まだそういう意識が向こうにあるんです。「これは部落の子だけの建物や」という意識は、部落の方にも、周辺の側にもありません。一般の親のなかには、「あそここのプールへ行ったらあかんよ」「トラコーマや病気がうつるよ」「いじめられるよ」といった差別偏見を子供にうつしている場合もないとは言えません。これでは、差別は解消されません。部落の側から積極的に周辺交流をうって出るイニシヤチブが必要ですよ。ただし単に一般開放するだけではダメです。プールサイドに、狭山のパネルでも、差別落書の写真などを貼っておく。そしたら、見るとはなしに見ますから、「これ何の写真や、これだれや」と一般の子は聞くでしょう。「石川のおっちゃんや」「石川のおっちゃんて誰れ」こうして自然に狭山のオルグができるわけです。部落の子供もこうして説明できるようにならねばなりません。それで私の日之出地区では、昨年「プール教室」を開いて周辺地域の子供らをまねいて、親たちからたいへん喜ばれています。

度二期から三期への移行は、福岡や大阪などやはり地域改善が一番進んでいるところの責任です。大阪は、四年前の第三〇回府連大会で、すでに新しい方向を出しているんです。これを成功させて、全国のきょうだいや、国民の期待にこたえていかねばならないと思います。情勢あるいは時代は、反動化と国際化という方向へ急速に質的に変わって来ている。運動史の流れの中でもまた、質的移行が求められている。情勢の上での質的変化と、運動史の上での質的変化、この二つの波が重なって来たと思うのです。そういう意味で、反動化と国際化時代において、第三期の創造、ということが現実味をもって追求されねばならないと考えます。

② そこで私なりの私案を提起することとします。まず、反動化に対応する方策の一例として、各部落に設備された公共施設の活用の問題です。解放会館、青少年会館、老人ホーム。一つの地区にいろいろ公共施設があるということは一地域ではみられません。「ねたみ意識」をあおられ、だんだん「部落特権論」でやられてしまいます。こちらのイニシヤチブで、一般開放を積極的にすすめることです。

わたしの部落の青少年会館には、付属のプールがありまして、なかなかrippなものです。この広いプールに、部落の子が十人くらい泳いでいる。すぐ近くの高いマンション

住吉青少年会館の体育館が、地域のママさんバレーの練習場として活用されている例、塩染壮(老人保養センター)を一般開放したことなど、それなりにとりくみがすすんでいます。部落の公共施設を積極的に一般開放することにも、そこに、展示やビデオを通して、自然に部落解放に接し、啓発されていく。このことを可能にするような施設の改善や展示などの工夫が必要です。町づくりの総合計画なども周辺とともにとりくんでいく。浅香の地下鉄車庫地跡闘争は一つの典型です。地区内の団結及び周辺との連携、共闘、この体制がしっかりできていけば、いかに権力といえども弾圧するわけにはいきません。

③ 次に国際化の問題については、外国人留学生が今、円高で大へん困っている。アジア、アフリカなどの人には下宿を拒否する差別の問題もある。又「ジャバ行きさん」といわれる外国人出かせぎ労働者、最近では男性が急増しています。差別的な低賃金で劣悪な労働条件のもとで働かされている。こうした問題にとりくんでいくといった視点が必要です。

松本治一郎さんが生まれて、百年。松本さんが、日本の水平運動を世界の水平運動にしていこうとしたこの「松本思想」を生かして、全世界のいろんな反差別的運動と連帯していかなければいけません。先日南アフリカのタンボ

氏を呼んだり、昨年末にはアメリカ黒人指導者のジャクソン氏をまねいたりして連帯を深めています。こちらからも積極的に出向いて国際連帯を積極的にやっつけていかなければなりません。国際化時代は、日本の企業がどんどん外へ出ていくということがありますから、そこに、いやが応でも文化摩擦や人権摩擦をひきおこします。中曽根首相のような単一民族や日本民族優秀論では、とても国際化時代ではやっていけません。

また国際化ということは外国人がどんどん入って来るということです。今度日本国内での問題が出てきます。二週間の観光ビザで来て、そのまま帰らないで、出稼ぎする。ばらされたら入管法違反者として逮捕され、強制送還されます。だから文句言えませんが、日本人やったら二十万円のところ、フィリピン人やつたら十万円でもだまっで働くということになります。土方日雇いなどには、次々、外国人に切り替えられていくことになれば、ここは伝統的な部落の労働市場ですから、部落の失業問題をひきおこします。こうなると、フィリピンと部落が対立関係にたたされます。これは国内の人権摩擦です。こうした問題にとりくんでいく観点が絶対に必要となってきます。

④ 国際化というものを放置していたら、人権摩擦や差別強化の新たな社会問題を生み出します。逆にそれを正しく

が、政府・自民党、あるいは官僚や学者など、今、日本は大きな岐路に立っていると思います。ここに人権の確立をめざす部落解放運動の大きな役割、出番があると思うわけです。

外国人留学生や労働者と積極的に交流をもつ、地区区内下宿先を斡旋するなり、彼らの要求や苦情を支援することです。人種差別に対しては断固彼らとともに闘っていく。こうした取り組みは、何よりも部落の青少年の目を世界にひろげ、国際的視野をもたせ、人類同権・平等の思想をもたせることにも大きく役立つことであります。

おわりに

今日の会合にも、企業の方が沢山お見えです。「地名総鑑」の糾弾は何を企業にもたらしたかを考えたいと思います。「地名総鑑」糾弾をうけて、部落差別について反省するにとどまらず、これを通して企業が人権感覚を身につけるチャンスを得たのではないかと思います。人権感覚を身につけなければ、これから、世界で、企業はやっていけない、そんな時代に際して企業に目をひらかせたのではないかと、「地名総鑑」の糾弾は企業にそのことをわからせたと思っています。もちろんわかったと言っても、企業の中で

もっていけば、部落解放の大きな力となります。日本人がもっともって国際人になるということは、黒も白も黄色もない、ことばは違っても、みんな同じ人間やないか、という考え方になって行きますね。それは部落差別はナンセンスやということにつながっていきます。逆に中曽根首相のあのような民族差別発言が出て来るような体質批判（意識変革）をやりきらなければ、真に日本は国際化できません。

シンガポール紙の特派員の陸培春（ル ペイチュン）さんの『驕る日本人』という本がサイマル出版会から出ています。是非読んでいただきたいと思いますが、私、この『驕る日本人』を読みまして、東南アジアから日本を見たきびしい本ですが、そこで、わたしは、これから日本が国際化して行く時に、戦前のように、軍国主義をバックとし、植民地主義的・帝国主義的という形で行くのか、そうじゃなくて人権意識を高めて平和国家として、友好親善の形で出て行くのか大きな選択だと思います。どちらのコースが真に国際化していく道かということです。企業の中にも、人権というものをしっかり持ってがんばってほしいという、いわゆる人権派と、目先の利益をあくことなく追求しようとする保守派との対立があると思いますが、企業だけでなく平和的な国際派と利己的な民族派といった対立

も、よくわかるのと、ちょっとしかわからんというふういろいろなありますけど、それでも、わかる方向がでてきたということですよ。

外国へ行って、日本人の社長が、日本語で「おはようございます」とあいさつして、現地の従業員に日本語をおしつけるのが正しいのか、こっちの方から現地のことばで「おはようございます」と言うのがいいのか。どちらの姿勢が正しいのかというだけでなく、どちらの方が現地になじむのか、答は明らかです。企業の利益にとってどちらが得なのか。平和と人権を大切にすることは、結局、企業自身のためであり、日本自身のためでもあります。部落解放運動の発展、人権意識の向上は、世界の平和と人々の幸せに結びついています。単に部落の差別や貧困をなんとかしろといった段階にとどまらず、周辺地域の問題や国内の反差別の運動、そして世界の差別や貧困の問題、平和や人権の問題に積極的にかかわっていく、そうした一つの社会勢力としての部落解放運動の創造です。こんな方向に部落解放の大きな発展の展望を見出したいと考えています。